

東日本大震災被災者の方々に向けた 現地主義からの応援メッセージ —平成12年9月12日に発生した豪雨災害を乗り越えた 長野県根羽村の教訓から—

この度の東日本大震災によってお亡くなりになられた方々のご冥福を心よりお祈りするとともに、ご遺族やかけがえのない財産を失われた皆様にお見舞い申し上げます。

東日本大震災により亡くなられた方は、7月6日現在12都道県1万5,538人、行方不明者は6県7,060人となり、改めて申し上げるまでもなく未曾有の大災害であり、近年の日本がかつて経験したことのない国難に直面しており、国の早急な被災地復旧・振興対策が求められています。

さて私達の村、根羽村は長野県最南端に位置する総面積約9,000ha、人口約1,200人、林野率92%の林業を基幹産業とする一山村です。全戸が5.50haの山持ちで、明治期以降の植林と森づくりに熱心であったため、森林整備が行き届いており、少しくらいの大雨でも災害にならないと村民は思っていたのですが、平成12年9月12日に、時間雨量90mm、5時間連続雨量450mmという猛烈な豪雨災害に見舞われました。

この記録的な集中豪雨で、道路・河川・耕地、山地崩壊等、想像を絶する自然の脅威をまざまざと見せつけられましたが、一人の怪我人も出なかったことは不幸中の幸いでした。この災害復旧費は総額約70億円で、これは当時の村予算の6倍に相当します。

根羽村の災害復旧は、最終的に国・県等の災害対策事業により対応したのですが、災害発生当初、私達が最も心がけていたことは、住民の安否確認や現地被災状況の把握でした。このために、時間雨量90mmを記録した9月12日の午前3時から4時の間に、速やかに役場内に災害対策本部を設置し、12日の午後には各消防団への出動要請、同時に炊き出しによる非常食の配布と給水車の出動を行いました。これ以降も、役場職員と村民が連携して、災害状況に応じて速やかに対応しました。このような迅速な行動を取った背景には住民・現場第一主義と、困難に直面しても決してあきらめないネバーギブアップの精神があります。

根羽村の住民・現場第一主義とは

- ①住民の安否・安全確保を第一として対策を立てて行動すること。
- ②村長というリーダーの指揮により、役場職員や消防団員・各種組織団体が—

- 致団結して、災害対策の役割分担と責務を果たすこと。
- ③災害復旧の基本である原形復旧の場合にあっても、現地住民の声を聞いて、現場に最も有効な対応策を検討し決定すること。
 - ④そうした住民の声を施策に反映させるため、あらゆる機関・制度・人材を活用していくこと。

です。

また、困難に直面しても決してあきらめないネバーギブアップの精神とは、平成16年当時、市町村合併推進時にも合併先から過疎の進む村としてそのメリットがないと断られたことから、村として決してあきらめることなく、村民と行政が共に汗を流すことにより、誇りと希望の持てる「ふるさと根羽村」を築き上げることを宣言した「ネバーギブアップ宣言」の精神のことで、村民ひとりひとりの心にこの精神が刻み込まれていたことも、大きな災害を克服できた大きな要因と考えております。

東日本大震災にあっても、決してあきらめないひとりひとりの地域住民が主役である、という地方自治の精神は不変であると考えます。根羽村はこうした住民・現場第一主義とネバーギブアップ精神により、自治機能を発揮させ、村民と共に未曾有の大災害を乗り切ることができました。

従って、現在被災されている皆様は、現在の状況が地方自治における住民・現場第一主義の考えから外れている、または意向が無視されている、というようなことがあれば、即刻地域の自治体に地域要望を伝え、適切な施策を求めるべきでしょう。

また、皆さんの故郷に対する思い入れや歴史・文化は、大変貴重なものです。それが、心の拠り所になっておられる方が大半だと思います。だからこそ、根羽村「ネバーギブアップ宣言」のように、そうした地域の再生・復興に向けて、決してあきらめることなく地域住民が一致団結して立ち向かわれることを期待しています。

最後に林業立村を標榜する当村では、スギ材を中心とした建築部材の安定供給に努めております。大震災と同時期に発生した長野県栄村の震災支援として、住宅1棟分のスギ材を無償で提供しました。

今後とも、困った時にはお互い様、住民・現場第一主義で、そして、地域住民が決して地域としての自立をあきらめない「ネバーギブアップ宣言」の精神により、困難を共に乗り越えて参りたいと思います。

(根羽村森林組合代表理事組合長、前村長 小木曾亮弑・おぎそ りょういち)